楽しく学びながら、一年間の基礎を作る

横浜国立大学
白井　達夫

「国語の授業初めは楽しい活動にしたい。」とは、誰しも思うことである。しかし、子どもたちの学習への期待が最もふくらんでいる四月、「楽しかった」で終わらせてはもったいない。今後一年間の学習につながっていくような活動を工夫したい。

話し合い方を学ばせる

工藤直子さんの詩集『のはらうた』（童話屋）は、野原の住人たちがしゃべったり歌ったりした言葉を書き留めたという体裁になっており、子どもたちはどの詩も大好きである。

四月初めの国語の学習において、私はよく、その「創作上の作者」を考えるという学習を行った。

まず、創作上の作者を明らかにしないままに、「のはらうた」の中の一編を私が読む。

はるがきた
ももいろの　すきとおる　みみに
きこえてくる　はるの　ひびき
おかのうえから　らん・らん
たんぽぽの　ふかふかのうた

そして、野原の住人の誰の言葉かを当てさせるのである。

子どもたちはたいてい、詩の中にでてくる言葉に目をつけて「タンポポだ」と言う。

そこで、どこの表現からわかったかも発表するよう伝えたのち、もう一度読んでみる。そのうちに、「ももいろの　すきとおる　みみ」といった表現に気づき、「うさぎ」という答えも出てくる。（『のはらうた』では、この詩の作者は「うさぎふたご」となっている）

ここで、「はい、正解です。この詩の作者はうさぎです。」と終わらせてしまったのでは、話し合いの力は育たない。前の児童の発言につなげて話すよう指示していくのである。

「私も〇〇さんと同じで、うさぎだと思います。うさぎの耳の内側はピンクをしているからです」

「ぼくもうさぎが歌っているかなと思いました。丘の上から、タンポポの綿毛が飛んできたことを『ふかふかのうた』と言ったのだと思います。」

こんな発言が出ると子どもたちからは、「オー」という歓声があがったりする。

この学習では、「創作上の作者」を当てることがねらいなのではない。友達の言葉を聞くこと、そして、それを手掛かりとして自分の考えを深めていくこと、さらには友達の意見と関連付けて自分の意見を発信していくこと、そういう学習の仕方を身に付けさせていくことがねらいである。

子どもたちの発言をつないでいくのは、低学年は教師でよいだろう。しかし、学年が進むにしたがって、子ども同士でつないでいけるようにしていきたい。

なお、「のはらうた」の中には「創作上の作者」が詩の中に記されているものもあるが、それらが教材として適さないのは言うまでもない。

書くことの楽しさを実感させる

作文が嫌いな理由を聞くと、「書くことがない」「書き方がわからない」「めんどうくさい」といった答えが返ってくることが多い。

学年初めから本格的に書く指導を行うと、そんな気持ちを助長しないとも限らない。

そこで、私は「春、見つけたよ」というミニ単元を作り、自分の見つけた春らしさを短文にまとめさせるという活動を行ってきた。方法は二つある。

一つは、教室に花のない桜の木を書いたもの（模造紙大）を掲示しておき、そばに、葉書の二分の一くらいの大きさに切ったピンクの色画用紙をたくさん置いておく。子どもたちは春を見つけたら、ピンクの色画用紙を桜の花びらの形に切り抜き、そこに自分の見つけた春を書き込み、模造紙の木に貼り付けていくのである。

貼られた花びらカードが増えるにつれ、幹と枝だけだった桜の木が満開になっていく。子どもたちの意欲は、自然と高まり、いろいろなところから春を探して、カードに書くようになっていく。

「校庭のすみに、黄色いタンポポが咲いていました。」

「学校へ来るとき、風が、やさしくなったよ。」

目の付け所の良いカードや、表現が工夫されているカードなどを教師が紹介することで、題材探しの目や表現方法の多様さなどを学ぶことができるであろう。

秋に、いちょうの木をつかって「秋、見つけたよ」という活動を行ったこともある。子どもたちは案外敏感に、季節の変化を感じ取っているものだと感心させられた。

もう一つの方法は、ワークシートを使い、個人ごとに見つけた春を、こちらも花びら型のカードに書いて収集するというものである。

用意するのは、片面が青く、片面が白い色画用紙である。（なければ青い色画用紙でもよい）

色画用紙を二つ折りして、その白い方の左側には春にまつわる詩を印刷しておく。

私は自作の詩（と呼べるほどのものではないが…）を用いた。

春の詩

真新しいノートを開けて
春の詩を書こうとしたら
真新しいノートの上に
ひらひらとさくらの花びら
ぼくは
そうっと　そっと
ノートを閉じた

右側のページは空白である。そこに、子どもたちは自分の見つけた春を、ピンクの花びら型のカードに書いて貼っていく。前日に春を探してくるよう課題を出しておいてもよいし、クラス全員で校庭などを散歩し、春をさがしてみるのも楽しいだろう。

本好きな子を育てる

四月だけでなく継続的に行っていくという意味では「授業びらき」というタイトルにそぐわないかもしれないが、低学年を担任した時には特に、毎朝読み聞かせを続けてきた。あまり難しく考えると長続きしないので、私は子どもたちに一つだけ約束し、それだけは守るようにしていた。それは、一年間、毎日続けるということである。学校に来れば先生の読み聞かせが聞ける、その期待に応えることだけは守り続けたいと考えた。

読み聞かせに使う本は図書室に行って選んでいたが、しばらく続けていると、「先生、この本読んで」と持ってくる子も出始めたので、なるべく期待に添うようにした。

教師の読み聞かせは低学年で行うことが多いようであるが、中学年以上で実施しても、子どもたちは案外喜ぶものである。

今、教え子たちに出会うと授業のことはほとんど覚えていないようだが、読み聞かせのことは覚えてくれているので驚く。

しらい　たつお　川崎市の公立小学校を退職後、現在は横浜国立大学の非常勤講師。主な著書に、『授業を豊かにする28の知恵』（三省堂）がある。